



しょうてんじょし 焦点助詞「どう」

この節では、文の中で強調したり、注目してもらう部分を表す助詞「^{じょし}どう」の使い方^{しょうかい}を紹介します。

ポイント

1. 文の中で強調する部分には「どう」をつけることがある。
2. 「どう」がついた文は、文末が特別な形になることがある。

1. 「どう」のはたらき

下の会話では、さとる君が「^{だれ}誰が泣いているの?」と聞いて、花ちゃんが「れいが泣いているよ」と答えています。花ちゃんの回答の中で、重要なところはどこでしょう?



さとる君

^{だれ}
誰が泣いているの?

れいが泣いているよ



花ちゃん

「^{だれ}誰が」と聞かれて、「れいが」と答えているので、ここは「れい」が一番重要なところです。こんな時、しむむにでは「れい=が=どう」のように、「どう」をつけて重要な場所を表すことがあります。



さとる君

たる=が なちゅい=よー?
誰=が 泣いている=か
^{だれ}
「誰が泣いているの?」

れい=が=どう なちゅん
れい=が=こそ 泣いている

「れいが泣いているよ」



花ちゃん

では、次の花ちゃんの回答の中で、重要なところはどこでしょう？



さとり君

れいは何を食べているの？

れいは ^{たまご}卵焼きを食べているよ



花ちゃん

この場合は「何を」と聞かれて「^{たまご}卵焼きを」と答えているので「^{たまご}卵焼き」ですね。すると、しまむにではこうなります。



さとり君

れい=わ んー かどうい=よ？
れい=は 何 食べている=か

「れいは何を食べているの？」

れい=わ ふがやち=どう かどうん=どー
れい=は 卵焼き=こそ 食べている=よ

「れいは ^{たまご}卵焼きを食べているよ」



花ちゃん

2. 「どう」の文の特別な終わり方

このように「どう」が出てきた文では、文末の動詞や形容詞が“特別な形”になることがあります。



さとり君

しまん＝やー わ＝が わろさ あたん
 ـــــــ
 ごめん＝ね 私＝が 悪い あった
 ـــــــ
 「ごめんね。 私わたしが悪かった」

あい うら あらんこ わ＝が＝どう わろさ あたる
 ـــــــ
 いや あんた じゃなくて 私＝が＝こそ 悪い あった
 ـــــــ
 「いや、あなたわたしじゃなくて、私わたしが悪かったよ」



花ちゃん

さとり君と花ちゃんのセリフに注目してみましょう。二人とも「私わたしが悪かった」と言っていますが、さとり君は「わが わろさ あたん」、花ちゃんは「わがどう わろさ あたる」と、少し形が違いますね。

まず注目したいのは、花ちゃんは「あんたわたしじゃなくて私わたしが…」と強調しているところです。花ちゃんは「私わたし」を強調しているので「わがどう」と「どう」をつけています。

もう1つ違いに気がつきますか…？ そう、さとり君の「悪かった」は「わろさ あたん」なのに対して、花ちゃんの「悪かった」は「わろさ あたる」と、最後の音が少し違うのです。

動詞の教材で、直説形(普通ちよくせつに終わる形)として紹介したのは「ーん」だったように、普通ふつうの形は「ん」なのですが、文の中に「どう」が出てくると、花ちゃんのように「ーる」で終わることがあります。(「る」を使いたいときは、「ん」が入るところに「る」を入れれば大丈夫です)

これは、古文の授業で習う「係り結びかかむす」の用法に対応するものだとされています。昔の日本語にあった文法の特徴が、しまむけいしよにの中に継承されている1つの例です。

1 ある文の要素が動詞によって強調された場合に、文末がそれに対応して、特定の活用形に決まる文法規則のこと。古典日本語や琉球諸語りゅうきゅうしよこにみられるが、現代の共通語ではなくなっている。

3. 使ってみよう!

「どう」は強調するときには必ず出てくる…というわけでもないのですが、^{ふだん}普通のやり取りの中で「どう」を自然に使えると、しなやかに上級者という感じがします!

下の文章の適切なところに「どう」を入れて、文を読んでみましょう。

(1)



たる=が あびてい=よー?

誰=が 呼んだ=の
だれ よ
「誰が呼んだの?」

せんせい=が あびとうたん=どー

先生=が 呼んでいた=よ
先生が呼んでいたよ



(2)



ぬー みちゆい=よー

何 見ている=の
何をみているの?

みゃー=ぬ がじまる みちゅん=どー

庭=の ガジュマル 見ている=よ
庭のガジュマルを見ているよ



答え:(1) せんせい=が=どう (2) がじまる=どう